

しかし、C群落を除いたグラフをみると増加傾向を示している、前述した2つの保護活動が8群落については効果があったようですし、結実率も増加傾向にありますので、ある程度の保護は出来たのではないかと考えます。課題としては、激減したC群落などの自生地を湿潤な状態にもどすことが必要になってきますので、09年より、①木枠内に土砂を投入して、ミニダムを造り、水位をあげる。②乾燥した群落の一部個体を湿潤地に緊急避難的に移植する。(昨年はC群落の7株を対岸に移植しました。)などを実施し、今後の推移を見守っていかうとしています。



(注) 小西毅氏 元鳥取県立高校教諭、元鳥取県山岳協会会員、「大山の頂上を保護する会」副会長として一木一石運動に取り組んだ。鳥取県西部希少野生植物保全調査研究会初代会長。

田島ヶ原でボランティアの活動が始まっています

本年度4月5日から、田島ヶ原サクラソウ自生地でボランティア「田島ヶ原サクラソウ自生地を守る会」(桑野昌会長)の会員30名ほどが、お揃いのジャンパーを着て解説などで活躍しています。

昨年度に会を立ち上げ、数回の研修会を開催して各自学習を積んだ上で、本年度春からサクラソウの変異や自生地内に生えているほかの植物などについて、ボランティアで解説をしています。

今期の活動は、3月末から予定されています。紺色で、背中に会の名前の入ったジャンパーで皆様のお越しをお待ちしていますので、気軽にお声掛けください。



[本年度のボランティア活動の様子]

戸田ヶ原の再生計画がスタートしています

かつて、自然に富み、サクラソウを始めとする多くの動植物が生息していた「戸田ヶ原」の再生を図るため、戸田市では平成19年度から荒川の流域で湿地の再生計画をスタートさせています。

戸田ヶ原は、300年以上の昔からその美しい風景が広く親しまれており、荒川の自然の営みと冬のカヤ刈りなどの人の手によって維持されてきた自然は、サクラソウを始めとする多くの野生の生き物を育ててきました。

「サクラソウなどの野生の草花が彩る湿地の再生」「キツネの親子が安心して暮らせる自然の再生」「カヤネズミがゆりかごをつくる草はらの再生」「ミドリシジミが舞う河畔林の再生」「カワセミが子育てをする水辺の再生」の5つを大きな柱とし、人と自然、あるいは人と人の交流の再生も計画しています。

近い将来、田島ヶ原と並んで戸田ヶ原にサクラソウが咲き乱れ、かつてのようにサクラソウのベルト地帯が出来ることを願っています。

田島ヶ原のいきもの(No.3)

—カワヤナギ (ヤナギ科) —

3月も半ばになると田島ヶ原は若草に彩られ、訪れる人々も多くなります。この時期、早くも花を咲かせているサクラソウに人々の注目が集まりますが、頭上のカワヤナギには花盛りでも気づかぬ人が多いようです。

カワヤナギは雌雄異株なので、雄株には雄の花穂を、雌株には雌の花穂を、葉の出る前の枝先に付けます。地元では、花穂が猫のしっぽに似ているのでネコヤナギと呼んでいますが、子供たちは毛虫みたいだと言います。

写真は雄の花穂で、毛虫の毛のような雄しべが見えますが、雌の花穂にはこれがありません。田島ヶ原に生えているヤナギの仲間は、マルバヤナギ、イヌコリヤナギ、タチヤナギ、そして本種の4種ですが、花穂はどれも良く似た姿をしています。



花穂の雄しべ



雌株の花穂

(さいたま市文化財調査専門員 磯田 洋二)

田島ヶ原の「草焼き」と「刈り取り」

さいたま市文化財調査専門員 磯田 洋二

江戸時代、荒川は毎年のように洪水を起こし、河川敷にある田畑では作物を収穫することが困難でした。このため、田島ヶ原は茅葺屋根や葦簀の材料にするオギやヨシを刈り取るための、萱場と呼ばれる場所として利用されていました。

ところで、作物を育てて収穫するには、肥料を与えて養分を補わないと田畑はやせてしまいます。田島ヶ原では毎年オギやヨシを刈り取るので、その分養分が失われて土地がやせる筈です。しかし、土地がやせることはありませんでした。その理由は、荒川の洪水によって多量の水と泥土が運ばれてきて、その中に含まれている沢山の養分が、肥料と同じ役割を果たしていたためです。

かつて洪水を起こして荒れ狂った荒川も、現在では近代的な河川管理が行われ、河川敷が水没するような洪水は少なくなりました。田島ヶ原の場合も、「荒川第一調節地」として高い堤防で囲まれているため、洪水で水没することがほとんどなくなりました。ところが、洪水の心配はなくなったのですが、今まで洪水が運んできてくれた養分も届かなくなってしまったのです。

田島ヶ原では江戸時代からオギやヨシを刈り取ってきましたが、最近になってオギやヨシの茎が細くなったり、緑の葉が白化するなど、やせた土地で起こるような現象が見られるようになりました。そこで、平成19年度から、オギやヨシを刈り取って外に持ち出さずに草焼きをして、出来た灰を土地に戻すことにしました。

植物が育つためには、養分の三要素〔窒素(N)、燐(P)、カリウム(K)〕が必要とされています。そこで、田島ヶ原の草焼きによってできた灰には、どれほどの量の養分が含まれているのか調べてみました。

まず、平成21年1月の中旬に、田島ヶ原を覆っているオギやヨシ群落とツル植物群落のそれぞれ3箇所から、1箇所ごとに4㎡の範囲を刈り取って燃やし、その燃え殻を篩にかけて灰を取り出しました。

次に、埼玉県農林総合研究センターに依頼して、灰に含まれる養分の量を分析してもらったところ、表1のような結果が出ました。これらの結果から、田島ヶ原の草

表1 田島ヶ原の草焼きで出来た灰の分析結果

オギ・ヨシ群落	No	採取場所	灰の重量 (4㎡当り)	灰に含まれる肥料の三要素量			
				水分	窒素全量	燐酸全量	カリ全量
	1	第1次指定地・A区	320g	1.17%	0.16%	1.46%	2.75%
	2	第1次指定地・B区	255g	1.48%	0.19%	1.70%	3.42%
	3	第2次指定地・F区	275g	1.56%	0.24%	1.86%	2.92%
		平均	283.3g	1.403%	0.197%	1.673%	3.03%

つる植物群落	No	採取場所	灰の重量 (4㎡当り)	灰に含まれる肥料の三要素量			
				水分	窒素全量	燐酸全量	カリ全量
	1	第1次指定地・A区	160g	0.79%	0.16%	3.79%	3.35%
	2	第1次指定地・B区	165g	1.75%	0.43%	2.70%	2.82%
	3	第2次指定地・F区	165g	1.55%	0.36%	3.77%	4.39%
		平均	163.3g	1.363%	0.317%	3.42%	3.52%

表2 田島ヶ原の草焼き1㎡当たりで出来る養分の量

群落	窒素全量	リン酸全量	カリ全量
オギ・ヨシ群落	0.140g	1.185g	2.146g
つる植物群落	0.129g	1.396g	1.437g
平均	0.135g	1.291g	1.791g

注：養分の三要素〔窒素(N)、燐(P)、カリウム(K)〕は窒素(N)、燐酸(P₂O₅)、酸化カリウム(K₂O)に換算

焼きで、1㎡当たり出来る灰に含まれる養分の量を算出すると、表2のようになります。

それでは、田島ヶ原の指定地全体では、どれほどの養分が草焼きによって出来るのでしょうか。指定地は面積が41,232㎡あります。ここにオギやヨシ群落とつる植物群落が半分ずつ生えているものとして計算すると、窒素(N)が5.57kg、燐(P)が燐酸(P₂O₅)として53.23kg、カリウム(K)が酸化カリウム(K₂O)として73.85kg出来たこととなります。これを市販されている1袋10kg入りの園芸用化学肥料(8:8:8)にすると、少なくとも6650袋にもなります。草焼きの結果、灰として多量の肥料が残ることが明らかになりましたが、刈り取って持ち去っていた時には、これだけ多量の肥料が毎年失われていた訳ですから、土地がやせたことでしょう。

田島ヶ原の土地がやせるのを防ぐために、これからは草焼きが冬の恒例行事となるはずですが、この文を書きながら、草焼きの時、灰が風に飛ばされるのを見て、もったいないなあと思ったりしたことが思い出されました。



つる植物群落(前方)と、オギ・ヨシ群落(後方)
2008.11.13.撮影



刈り取り作業
2007.1.12.撮影



草焼き作業
2009.1.21.撮影



4㎡分の燃え殻
2009.1.17.撮影